

A 病院が取り組んできた「with コロナの訪問診療」成果と課題

法人名	医療法人篠原湘南クリニック
病院名	クローバーホスピタル
職種・所属	看護主任在宅診療部
氏名	宮地朋子
協力者	石渡俊次 小池仁美

【背景】A病院は回復期・慢性期に位置する170床の在宅療養支援病院である。基本理念は「地域に密着した入院のできる在宅医療・医療のある介護の実践」である。在宅診療部は、職員数36名で、地域の居宅や施設で暮らす患者約1000名を、月2回の定期訪問診察を基本に、緊急時24時間365日往診対応の診療を行っている。在宅生活を送る患者にとって、訪問診療はその療養を支える医療サービスの一つであり、ケアマネージャー（以下CM）をはじめ、利用する地域のサービス事業所との多職種連携で成り立っている。

【目的】2020年からのコロナ禍で、患者や施設から訪問診察に対し不安の声が聞かれ、サービス事業所と連携を強めながら、状況に応じ診察方法を柔軟に変更してきた。A病院でも2021年3月に病棟で院内感染の発生があり、在宅診療部においても患者の不安に対し対応を行った。今後もしばらく続くと思われるコロナ禍で、「withコロナ」をテーマに、これまでの取り組みの結果と今後の課題について明らかにする。

【結果】①COVID-19院内マニュアル・環境感染学会ガイドライン等に基づき感染防護策を講じ、診察はできるだけ短時間になるように努めた。

②居宅の定期訪問は、訪問を拒否する患者に対しては、定期訪問2回のうち1回を電話診察に切り替えた。CMや訪問看護師との情報共有を密にした。

③施設定期訪問は事前にFAX等で情報を得て、診察時間の短縮に努めた。施設側の要望で対面診察を控えた場合は、施設看護師と面談し処方や指示を行い、必要と判断した場合は短時間で診察や検査を行った。

④緊急往診時も同様の対応を行った。

⑤病院・施設・事業所にコロナ発生があった場合は、即時情報交換を行い、混乱を最小限に留めるよう努めた。

【まとめ】コロナ禍で、感染予防対策を行いながら適切に診療を継続できている。患者・家族はもとより、CM・訪問看護師・施設スタッフ等多職種からの細やかな情報提供により成立していると言える。しかし、顔を見て、実際に身体に触れて得られる情報や、そのコミュニケーションで築かれる患者・家族との信頼関係と安心は、有効な診療を行う上で軽視することはできない。独居・老老介護の家庭、高齢者のデジタルディバイド問題もあり、現状としては、感染対策を十分に行った上での訪問、電話診療を続け、多職種連携を深め、問題を早期に解決することなどが今まで以上に重要になる。そこで連携を強めるためのツールとしてICT利用は積極的になされるべきであろう。入院を避ける傾向もあり、ますますwithコロナの訪問診療は重要度を増している。

新型コロナウイルス感染症に伴う医療保険制度の対応について

<https://www.mhlw.go.jp/content/12404000/000624500.pdf>

日本医師会 COVID-19 有識者会議在宅医療の現場からの一考察武藤真佑

<https://www.covid19-jma-medical-expert-meeting.jp/topic/2196>

医療機関における新型コロナウイルス感染症への対応ガイド第3版

http://www.kankyokansen.org/uploads/uploads/files/jsipc/COVID-19_taioguide3.pdf